

【ワークショップ】

いま日本で哲学すること

末木文美士(国際日本文化研究センター名誉教授)

岡田勝明 (姫路獨協大学教授)

安部 浩(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

司会：井上克人(関西大学教授)

「関西哲学会」は終戦後まもなく昭和 22 (1947) 年に、九州を除いた西日本の諸大学における哲学関係の研究者を中心に結成された学会である。

さて、今から 52 年前、すなわち昭和 42 (1967) 年度の関西哲学会は神戸大学にて開催されたが、その折の公開シンポジウムは、「現代日本の哲学」と題して行われた。明治 100 年と言われる時機に際して、日本の哲学というものの過去と将来について反省してみるということを主眼とし、過去の長い伝統をも包括した視野のもとで現代の日本における哲学の課題という問題を焦点としたものであった。提題者は 3 名、梅原猛、上山春平、船山信一であった。梅原はヨーロッパ哲学移入以前にも日本に伝統的な「哲学」はあったとし、奈良・平安の古神道および真言・天台の密教は無視できず、心・生命・地獄の三つの思想があると強調する。梅原の理解では心の思想は唯識、生命の思想は神道と密教、そして地獄の思想は天台や浄土教ということになる。上山も仏教や儒教も外来思想であり、それを移入してきたなかに「哲学」はあったと主張。また空海や道元をはじめ、徳川期の伊藤仁斎、荻生徂徠、富永仲基、三浦梅園、山片蟠桃らの思想も日本の「哲学」と称してもよいとする。船山は明治以後現代までの「日本哲学」は明治期の「現象即実在論」に見られるように「現実主義」であり、その論理と克服こそ将来の課題であることを知る必要があるとする。また留意すべきは日本の近代哲学はもっぱら成果すなわち「成ったもの」としての西洋哲学を受容してきたに過ぎず、それが「成る」形成過程の歴史には踏み込んでこなかったことを指摘する。

三氏の報告と討論は「日本哲学」という概念の曖昧さもあって、ほぼ哲学的観点から日本の過去に向けられていた。そして船山は、「日本哲学」を日本で現に研究されている哲学と解し、明治以降の西洋哲学移入の仕方を反省しようとし、梅原・上山は「日本哲学」を日本の過去の伝統的思想と解して、船山とは逆に明治以前の独創的哲学を探り当てようとしたものであった。しかしいずれの場合にも、基本的には「哲学」をどう解するかが、まず問題とならねばならないであろう。それは一言でいえば、新たな〈全体知〉を確立することであろう。しかしそのためには徹底した自己省察と批判的対話を反復することによって、抑制ある仕方で一步一步準備されねばならぬ。

ところで、このシンポジウムの質疑応答で、ギリシア古典の文献学的知見に基礎を置く

いわば正統派の哲学研究者である藤沢令夫と、そうした講壇哲学を批判して直観力と想像力を駆使して日本の哲学の独創性を示唆する梅原猛の間で丁々発止の論争があって、両者の「哲学的立場」の相違を浮き彫りにさせ、面白い記録となって残っている。理性一辺倒の西洋哲学は狭いと批判する梅原に対して、藤沢は、理性の立場が出てくる背景には非理性との格闘があったことは無視できないと指摘し、また生命を尊重する立場はプラトンのプシュケーにまでさかのぼることができるのに、梅原の視点はそこまで及ばず、標榜する生命の哲学も所詮はニーチェやベルクソンに留まっていて、狭いのは梅原の方だと譲らない。(西谷啓治編『現代日本の哲学』雄渾社 1967年) 共に田中美知太郎のゼミ生仲間であったこの二人は、よく喧嘩したようである。

さて、この大会が開催されて50年余り経ち、翻ってわが国の哲学界を見ると、欧米の流行思想の紹介と咀嚼、そして西洋の古典哲学の歴史的研究は相変わらず盛んだが、互いの省察を批判し合うかたちで各自の思惟を推し進めていくという、真の意味での哲学論争はめったに見当たらない。しかし論争は、さかのぼれば日本仏教史においても「宗論」はあったし、戦前の京都学派の哲学にあっては、西田幾多郎に対する田辺元や高橋里美の熾烈な論争があった。したがって現在の論争不在の原因を国民性や伝統のせいにするわけにはゆかない。何がこの不在の原因であろうか。かつて隆盛を誇った京都学派の哲学が閉塞の一途をたどることになった原因は、それを継承する方向でなされた仕事の大部分が西田や田辺に見られたような哲学的論理による体系構築への努力を欠き、もっぱら禅経験から一切を説明する宗教的経験主義に陥り、かたやそれに心酔もしくはそれを憧憬するものが現れる一方、かたやこの学派の戦争責任問題もからまって、それに反発し敬遠してしまうものも多数出てきてしまったことによる。しかるに現在の京都学派の哲学はそうした状況をようやく打開し、若い世代の研究者や海外の研究者も増え、今までにない新たな視座から京都学派の哲学を捉えなおす動きが活発になってきた。

ところで、戦後の京都大学の哲学科を再建したのは、京都学派の影で地味な哲学史研究に勤んでいた哲学史家たちである。西欧の哲学史をテキストに忠実に研究し直すことによって、正統の哲学研究を日本に移植しようと信じたのである。この信念は戦後の京都に、一方で信頼に値する原典の翻訳と古典研究をもたらすと共に、他方で西田や田辺に見られた、自ら思索しようとする努力 (Selbst-denken) を忌避するような雰囲気醸成したことは否めない。このような事情を一言でいうと、「文献研究」の安全地帯に逃げ込むか、あるいは「科学主義」や「宗教的経験主義」という「閉域」にそれぞれ閉じ籠って、自由な対話と相互批判の精神を失ったということである。こうした状況を何とか打開しなければならないという反省から関西圏で発足したのが「現代哲学研究会 (現哲研)」にはかならなかった。それは定期的に研究会や講演会を催し、関東圏からも夙に知られた哲学者を招聘するに留まらず、ドイツやフランスからも当時の著名な哲学者を招聘して講演会を開き、活発な議論が展開された。そうした現哲研の活動の一環として、現象学や解釈学、科学哲学や分析哲学、新マルクス主義や実践倫理の諸問題を含む「現代哲学の根本問題」の叢書

が刊行されていった（晃洋書房）。そして現在の「関西哲学会」は、この現哲研の流れを曳いていることは言うまでもない。

哲学は、第一に論理的な学問知としての側面、第二に自ら生きる姿勢を自覚するような世界観、人生観としての側面、この二つの側面がある。この両者を踏まえた哲学こそが〈全体知〉の立場であり、こうした〈全体知〉としての哲学が、今、この日本に生活の基盤を置く哲学研究者に求められているのではないであろうか。それを実現させていくためには、それぞれ相異なった立場からなる対話と論争が必須であろう。

さて、今回のワークショップは、以上のような自省と課題を踏まえながら、令和の時代を迎えた現在、脱ヨーロッパ化に向けた「世界哲学」が喧伝されてきたことに鑑み、いま日本で「哲学」研究を営んでいる我々が、関西圏や関東圏、そして東北や北海道、九州といった地理的閉域を越えて、どのような仕方で、そしてどのような姿勢で、またどのような課題を追求すべきなのかを、原点に立ちかえって考えてみることを主眼とする。

ここ数年の間に、世界のグローバル化が席卷してゆくなかで、日本の哲学の状況も徐々に変化してきており、分野を越えて、さまざまなかたちで哲学的な切り込みが行われてきている。例えば、日本仏教史が専門の末木文美士氏は『明治思想家論—近代日本の思想・再考 I』（トランスビュー、2004年刊）をはじめ、「哲学を厳密さの檻から解放し、日本の近代思想を土台に豊かな思索の実践を繰り広げる」意図をもって、『哲学の現場—日本で考えるということ』（トランスビュー、2010年刊）を上梓、更には『死者と菩薩の倫理学』（ふねうま舎、2018年）および『いま日本から興す哲学』（同、2019年）を刊行されて、氏の独創的な「冥顕の哲学」を提唱されている。顕密仏教に培われ、日本の中世思想から近代哲学に至る壮大な流れを踏まえて、現代の存在論や脱構築と対話し、時間論、他者論などを死者の哲学を媒介にして、理性の届かない生存の暗がりから思索を展開する末木氏の哲学・倫理学の営みは、いまこの日本で哲学するものにとっては、けっして無視できない多くの示唆と課題を含んでいるように思う。今回のワークショップではその末木氏をお迎えし、いま日本で哲学するということがいったいどのような営みであるべきなのかを探ってみたい。

さて、登壇者のうち、岡田勝明氏は、フィヒテ哲学を専門とされる一方、西田および西谷など京都学派の哲学の造詣も深く、『フィヒテ討究』（創文社）をはじめ、『フィヒテと西田哲学』（世界思想社）、『開かれた孤独—思想の源流に求める人間の所在』（同）、『良寛への道—言葉に生きる』（燈影舎）、『自己を生きる—読書と哲学』（同）、『悲哀の底—西田幾多郎と共に歩む哲学』（晃洋書房）などの著書がある。現在、日本フィヒテ協会会長。

安部浩氏は、ハイデガーやヨナスをはじめとするドイツ現代哲学を専門とされる一方、環境思想や共生思想に深く関わっておられ、さらに日本の哲学思想にも造詣が深く、2017年にはフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞（ドイツ連邦共和国）を受賞されている。著書に『「現」/そのロゴスとエートス—ハイデガーへの応答』（晃洋書房）がある。